



シヨベルを持つ姿が堂に入る。好きな言葉は、法華経の「一心欲見佛 不自惜身命」||宮城県石巻市

フロントランナー

Front Runner

やまぐち
山口 スティーブさん (51歳)
トラベル東北社長

「脱依存」の東北復興を目指す

がれきの続く大地と空とが、以前なら建物に阻まれて見えるはずのなかった地平線で交わっている。

6月初旬の週末、宮城県・牡鹿半島。先端の集落で、自ら企画したボランティアツアーの客と、地震や津波で壊れた民家や養鶏場の復旧作業に汗を流した。

倒壊したブロック塀を金属のハンマーで砕いていく。全身を使った、力強くそれでいて無駄のないフォームは、旅行会社の社長というイメージからはすいぶん遠い。

そう、4年前までは土木建設会社を率いていた。「全国の土建業界でたぶん、唯一の白人社長」。ちゃめつけを含んだブルーグリーンの瞳が、ぐるんと動く。

日本現代政治の論文を書くため米西海岸から東大に留学後、東京の大手商社に入社。絵に描いたようなエリートサラリーマンだった。

転機は、妻との出会い。山形県北の最上町にある地元屈指の土建会社の一人娘で、当然ながら結婚に猛反対された。義父が最後に泣き出ししてきた条件が、「日本国籍をとり、養子になって家業を継ぐ」だった。

松尾芭蕉ゆかりの地へと移り住んだ米国育ちの婿を待ちうけていたのは、公共事業を軸に政・官・業が癒着しあう地方経済の現実。パブル崩壊を受けた景気対策の大盤振る舞いで、建設業界は空前の好況ぶりだったが「こんな仕組みはいずれ限界がくる」と思わざるをえなかった。

2007年、半世紀続いた会社の看板を下ろした。

「13年間で、官製経済への依存がいかにも地方をだめにするかを痛いほど味わった」。新たな地域再生ビジネスを、と目をつけたのが観光業だ。

自然や温泉、食材——幸い観光資源は豊富にある。大手が手がけるお仕着せの駆け足ツアーではない、旅行者の自己実現への欲求を具体的な形にする「滞在型」の旅を。会社清算後に残った資金で小さな旅行会社を買収、「トラベル東北」を起した。

「奥の細道」をたどる俳句ツアー。馬の産地にちなんだ乗馬ツアー。独自の企画は口コミで評判が伝わり、映画のロケ誘致にも成功。他県との連携が視野に入り始めた矢先、大地震が起きた。

3月以降、予約キャンセルが相次ぐ中、透析患者を移送したり水を届けたりと被災地へ足を運んだ。避難所生活を送る宮城県民を山形県の温泉に招く委託事業に奔走するなか、牡鹿半島にたどり着く。支援の手が、ほとんど入らない孤立地区。惨状を目の当たりにして、ボランティアツアーを思い立った。

「長期滞在はむずかしいが、週末だけでも」という社会人の気持ちにこたえる企画にした。新幹線の駅に集合後、バスで牡鹿半島まで移動。宿泊テントや食事を用意する。「政府や役所が何かしてくるのを待つのではなく、自分たちで動き、話し合っ町や地域を立て直す。そういう復興を実現したい」

ご意見・ご感想は be@asahi.com

b3面に続く

文・高橋万見子
写真・小宮路 勝